

## 【論文】

## ドストエフスキイにおける子ども—『白痴』をめぐって

秦 野 一 宏

## 1.

『白痴』ほど説明にこまる偉大な文学作品はまれだと、こぼす批評家がいる<sup>1</sup>。実際、『白痴』のあら筋をたどっても、小説の印象はまるで伝わらない。主人公であるムイシュキン公爵は、幼い頃から病気で、精神機能も正常でなかった。この病の治療のために、彼はスイスに何年間か滞在するが、どうやら回復して、遺産相続をするためにロシアに帰ってくる。アグラヤとナスターシャ・フィリポヴナという美しい二人の女性が彼を愛し、彼も二人を愛する。前者はうら若い將軍の娘で、後者は、幼い頃トーツキイという大金持ちの地主貴族に引き取られ、のちに彼の囲い者になった女である。ムイシュキンはどちらも愛しているのだが、憐れみの情からナスターシャと結婚しようとする。ところがいざ結婚という段になると、女は逃げ出し、別の求婚者ロゴージンのもとに走る。ロゴージンは、ナスターシャが自分よりムイシュキンの方を愛しているのではないかと嫉妬し、彼女を殺害する、云々。

このように説明しても、何か『白痴』ではない別の話になってしまう。ムイシュキンは、ある無神論者の学者と話した時の印象を、「何かなんだかはじめから終わりまで、まるで見当違いの話を聞かされているみたいだった<sup>2</sup>」と語っているが、同じことが『白痴』のあら筋に関しても言えるのだ。その一番の理由は、主人公であるムイシュキン当人にある。たとえば、ナスターシャを愛したのは憐れみの情からなのだといくら説明しても、ムイシュキンその人の性格がニュアンス含みで読者に伝わらなければ、彼の愛情はまったく別のものと受けとられ、つまるところ物語は、淑徳高い令嬢を見捨てても、墮落した女を救済しようとするけなげな男の通俗的なお

話に墮してしまうだろう。実際、ムイシュキンと二人の女性をめぐる町の人々の噂話はそのような見当違いなものであった。

見当違いの話を作るのはエウゲーニイ・パーヴロヴィチも同じだ。ムイシュキンは、自身の話が彼に伝わらないことを嘆いて、「あなたには説明できません」と告げている。ドストエフスキイは、エウゲーニイ・パーヴロヴィチという傍観者にムイシュキンをめぐる話をあえて解釈させることによって、「見当違いの話」を作りだす読者の姿を作品の中に組み入れているのだ<sup>3</sup>。エウゲーニイは自身の解釈にのめりこむが、それは解釈すること自体がおもしろいからである。彼は「突拍子もないこと」に出くわすとわくわくする。いい暇つぶしになるからだ。「同時に二人の女を愛するって？ 何か別々の愛情でか？ こりゃおもしろいな……。かわいそうなバカ〔白痴〕だ！ それにしてもあの男はこれからどうなるのだろう？<sup>4</sup>」—この主人公はいったいこれからどうなる？ 安楽椅子に腰掛けて、波瀾万丈の小説を読む気楽な読者のように、彼はムイシュキンの話を遠くから楽しむ。

ムイシュキンとナスターシャ・フィリポヴナの関係をめぐるエウゲーニイの解釈はこうだ。「あなたがた〔ムイシュキンとナスターシャ〕のことはそもそもが、嘘ではじまったのです。嘘ではじまったことはまた、嘘で終るはずのものだった。それが自然の法則というものです。(…)これは断定して言えることですが、今度の事件の一切の基礎は、第一に、あなたの、いわば生まれつきの未熟さから(…)、それと、あなたの並外れた純朴さ、さらには(…) 稀有な節度感の欠如から、そして最後に、頭でっかちの信念の、寄り集まった巨大な塊から成り立っているのです。あなたはそれをこれまで、並々ならぬ誠実さで偽りのない、生粋の、自然な信念であると取り違えていらっしゃるのですよ！<sup>5</sup>」。エウゲーニイに言わせれば、ムイシュキンのナスターシャへの愛は単なる思い込みにすぎない。ロシアを何とか救ってやろうと、燃えるような実行欲を抱いてスイスからやってきた観念的デモクラートが、忌まわしい社会によって墮落させられた女に出会って感激し、自身の寛大な思想を公然と表明できる機会に飛びついただけで、そこには最初から愛などというものはなかった。要するに、ムイシュキンが未熟な子どもであることが、すべての原因であったと、そうエウゲ

ーニイは「事件」を読み取っているのだ。人の心を見通すことができると自負する男のあられもない解釈である。

なるほど、エウゲーニイの指摘するように、ムイシュキンは子どもかもしれない。自分が子どもに似ているということに関しては、ムイシュキン自身も全面的に認めている。—「わたしは 27 歳になりますが、まるで子どものようだということは、自分でも知っています<sup>6</sup>」。「また感情に節度というものがありません<sup>7</sup>」。しかしだからといって、ムイシュキンを「未熟」という言葉で切り捨てることはできない。エウゲーニイはおそらく、子どもを美しいと感じたこともないのだろう。あるいは問題は、エウゲーニイが拠って立つ世間一般の子どもに対する固定観念にあるのかもしれない。

よく知られているように、ドストエフスキイは姪のソフィアに宛てた手紙の中で、『白痴』の「主要な意図」は「無条件に美しい人間」を描くことにあると述べ、その美しい人間の具体例としてキリストをあげている<sup>8</sup>。しかし同じ手紙の中で彼はまた、そのような美しい人間を描き出すことは、「特に現代においては」難しいとも述べている<sup>9</sup>。ドストエフスキイにはキリストを現代人として蘇らせるための生きたイメージが必要だった。このために「瘋癲行者（ユロージヴィイ）」やドン・キホーテが参照されたことは、作品中に直接的な言及があることから明らかである。そして両者と同等か、あるいはそれ以上に重要な素材となったのが、『聖書』の時代においても現代においても変わらぬ子どものイメージである。美しいムイシュキン像創りの核となった根源的イメージはまさに子ども、あるいは子どもの心をもった大人であった。「子どもたちのおかげで魂がいやされるのです<sup>10</sup>」、「子どもたちの小さな心はなんとデリケートで、やさしいことでしょう<sup>11</sup>」、—こうしたムイシュキンの子どもを称える言葉に共感できないエウゲーニイたちには、『白痴』は見当違いの話になってしまうのだ。

子どもはキリストを媒介するだけではない。また、子どもはムイシュキン像だけに関係するわけでもない。『白痴』という作品世界においては、子どもあるいは子どもと大人の対の関係が、常に意識されていて、読者は「子ども」とは何者であるのかを絶えず考えさせられる。しかし答えを出すこ

とは容易なことではない。ドストエフスキイが用いる子どものイメージ、大人のイメージは単一なものではないし、そうであればもちろん、両者の関係も単一ではない。このことが読者を戸惑わせ、時に苛立たせさえする。そしてわかりやすく、もっと単純化できないものかといふ考えてしまう。それは、明確な意味を求めるある種の「知」の要求である。作中では、ムイシュキン話を聞いてもやもやした思いに駆られたアレクサンドラが自身、ムイシュキンになり代わって、彼の言いたかった教訓はこうだといとも簡単に説明してしまう場面があるが、＜ムイシュキンをめぐる物語＞を読む者は、アレクサンドラと同じ轍を踏まないように心しなければならない。ドストエフスキイはいつも読者の心理を読んでいる。エウゲーニイだけでなく、姉のアレクサンドラもまた「たいせつな知」とそうでないものの違いが分からないと、アグラーヤに語らせているのはドストエフスキイなのである。

ムイシュキン公爵は、いろんな意味で子どもである。「すべての点において、すべてのいい点においても、すべての悪い点においても、まったくの子どもですね」とは、リザヴェータ夫人の人相見をした時のムイシュキンの言葉だが、この人物評はムイシュキン自身にも当てはまる。「あなたはまったく子どもですね」、「どうかすると、まるっきり子どもになってしまいますね」というイポリートのムイシュキン評もまた、いい悪いを含めた「すべての点において」という意味であった。

ムイシュキンは生まれてからずっと「癲癇とか舞踏病のような、一種不思議な神経の病」に苦しめられてきたために、誰もが通る子どもから大人へ向かう思春期を体験していない。ムイシュキンがロゴジンに語ったところによれば、この「生まれつきの」病気のために、彼は「まったく女というものを知らない」。このことは、E.H.カーの指摘するように<sup>12</sup>、ムイシュキンが性的不能者であることではなく、性的に無垢であることを示しているのだろう。想起されるのは、生涯、女性と性的関係を持たなかった宮沢賢治である。作中の人物と実在の人物を比べるのも変な話だが、子どもに対する態度といい、愛他的理想といい、二人はきわめてよく似て

いる。意志したかしないかは別にして、ともに性的情熱によって費やされるはずのエネルギーがすべて、最高の理想の実現という一つの大きな目標へと振り向けられていることだけは疑いない。

成長して恋をし、そして結婚へと向かうのが一般的な大人への道のりであるとすれば、「生まれつきの病気で、まったく女というものを知らない」ということは、ある意味で、からだは大人だが、精神的には子どものままであるということになろう。何年もムイシュキンの面倒を見てきた精神科医のシュナイデル先生も、ムイシュキンのことを「完全な子ども」であると考えた。背や顔は大人に似ていても、「発育、精神、性格、ことによったら知恵までも決して大人ではない」と彼は言う。このようなシュナイデルの言葉は、『星の王子さま』の分析を通じて、作者のサン＝テグジュペリを「永遠の少年 (=大人になれない未成熟な人間)」と断じた心理学者フォン・フランツの言葉と通じるところがある<sup>13</sup>。子どもを内に抱え込んだままの大人たちをどう見るか。フォン・フランツのように、いまだ大人になりきれない者として軽んじるか、あるいは内なる子どもを人間の中の人間と見なして、そのようなく子ども>をもった人間を人間らしい人間として尊重するか、どちらの見方をとるかで、ムイシュキン像はまったく異なるものになる。面白いのは、このムイシュキン像が他の登場人物たちの性格描写に深く関わっているということだ。教養や社会的地位とは無関係に、ムイシュキンをどのように見るか、その一点によって評価者がどのような人間なのかが分かる。ペテルブルグへ向かう列車の車中でムイシュキンとレーベジェフに出会ったロゴージンは、媚びへつらうレーベジェフには「決してほれこまなかった」にもかかわらず、ムイシュキンには「ほれこんだ」。ムイシュキンは、ロゴージンの質問がぶしつけであったり、退屈まぎれであったりしても、子どものように「まったく疑ってみることもなく」淡々と答えている。だからこそロゴージンは、ムイシュキンを好きになったのだ。レーベジェフの娘ヴェーラ、コーリヤ、イポリート、リザヴェータ夫人、ロゴージン、アグラヤ、ナスターシャ・フィリポヴナ、イヴォルギン將軍、ケルレルなど、程度の差はあれ、また、時に反撥することもあるにせよ、ムイシュキンに惹きつけられる者はみな、誠実さをなくしていな

い、心やさしい人たちである。

子どもはこの世界に生きている時間がまだ短く、人生経験も少ない。金銭欲や世間の「礼儀」あるいは常識をまだ身につけていない。大人たちからみれば未成熟で無邪気だということになるだろうが、だからこそ子どもは自分の利害を離れられない大人と違って、余計な忖組、雑念にとらわれなくて、ある種の洞察力をもつことができる。「叡智あり、知恵ある者に秘め隠して、幼児に示したもう」とは、レーベジェフがムイシュキンについて語ったもので、こむずかしい言い回しができることをひけらかす言葉の一つだ。彼は自分が「だれにも尊敬されない」取るに足りない男であることを知悉しているからこそ、文語調の言葉で自身の大人の「知」を懸命にアピールしているのだが、言葉そのものの意味するところは間違っていない<sup>14</sup>。アグラーヤがエウゲーニイや姉のアレクサンドラにないもので、「ママ」(リザヴェータ夫人)にあると感じている「たいせつな知 главный ум」はまさに、知恵があると思いついでいる大人にはない「知」であった。

大人たちの多くは、ガーニャのように「なんでも自分を標準にしてものごとを判断する」のが常だが、子どもは違う。子どもはあけっぴろげに、率直にものを考える。欲や利害にとらわれなくてこのようなく子ども>の「知」こそもっとも真理に近いものであると、ドストエフスキイも考えていたのだろう。ナスターシャがムイシュキンを、そしてイポリートがリザヴェータ夫人を評した言葉を用いていえば、そのような「たいせつな知」をもった子どもこそ「(本物の) 人間」であるということになる<sup>15</sup>。

『白痴』の創作ノートを見ると、ドストエフスキイが一時、ムイシュキン公爵の周囲に「子どもクラブ」を形成しようとしていたことがわかる。公爵の個人的な問題も一般的な問題もどうやら、ここで解決される手はずになっていた。同じ個所に添えられた「大人たち(その計画、助言、依頼、事務上の提案)への不信」というメモ書きからも分かるように<sup>16</sup>、クラブが考案された背景には、嘘をつく信頼できない大人と、本当のことを言う信頼できる子どもの対立するイメージがある。このメモは第2編を執筆している頃に書かれたものだが、すでに第1編においてドストエフスキイは、

「大人たちは、子どもがどんなに難しい問題においても、きわめて重要な助言を行えるということを知らないのです<sup>17</sup>」とムイシュキンに言わせていた。

「子どもクラブ」は実際には描かれなかったが、クラブの役割は「誰よりも少なく生き、誰よりも生活を知らない」ムイシュキン一人が背負い込むことになった。療養していたスイスの村でムイシュキンは、「子ども」のほうが「大人」を教えてくれるのだと学校の先生に語って、先生から嘲笑されたことがあるが、ムイシュキンが結果的に何かを教えるということになれば、それはまさに「子ども」として教えるのである。

しかし、子どもが大人を教えるという逆転の発想を真剣に受けとるならば、教えられる「大人」のイメージも当然のことながら変わらざるを得ないだろう。

ムイシュキンは、エパンチン家で催された夜会で例によって節度を忘れ、善良な人々だと信じこんだその場の上流社会の人々にむけて、自分の思想のすべてを説明しようと意気込むが、そこで彼はこんなふうな考えを披瀝している。前を行く一人の先覚者に対して、無数の遅れた邪な人間がいるからといって何だというのか。その無数の人間たちはみな、完全なものになるための「生きた素材」だ。「我々」も同じである。「我々は滑稽で、軽薄で、悪い習慣に染まって、退屈しきって、ものを見ることも理解することもできないんですから。我々はみな素材なのですよ、あなた方も、この私も、世間の人たちも！<sup>18</sup>」。一まだ出来上がっていないものが素材だとすると、「生きた素材」は「子ども」を連想させる。常識的な見地から言えば、素材が完全なものになる過程は、子どもが大人への成長してゆく過程に重ねられるだろう。しかしムイシュキンは、無数の人間、貴族である「我々」や世間の人々、ひっくり返ればすべての「大人」もまた素材であると言う。これは、「先覚者」を唯一の例外として、すべての大人も子どもだ、と言っているのに等しい。そしてすでに触れた、子どものほうが大人を教えるというムイシュキンの考えを受け入れるとすれば、先覚者は大人でありながら、子どもでもあるということになる。

ムイシュキンの考える先覚者は、おそらくはキリストである。このキリ

ストの前では、ムイシュキンもまた、みんなと変わることのない「生きた素材」である。ただ、創作ノートに「キリスト公爵」というメモ書きがいくつも残されていることから分かるように、作者であるドストエフスキイは＜大人でありながら子どもである＞ムイシュキン公爵自身を「先覚者」キリストとだぶらせてイメージしている。

先覚者ムイシュキンは＜子ども＞を教えるだけでなく、弱い者、無力な者を救おうとする。そしてこの無力な者には、助けを求め泣き叫んでいる「子ども」のイメージが重ねられている。その典型的な例はナスターシャ・フィリポヴナである。ムイシュキンはエウゲーニイに言う。「わたしは心から〔ナスターシャを〕愛しています！ なにしろ、あれは……子どもですからね。今は彼女は子どもなんです、まったくの子どもなんです。ああ、あなたは何にもわかっていらっしやらない！<sup>19</sup>」。

ムイシュキンのスイスの村の話に登場するマリーもまた、ナスターシャと同じ、無力な「子ども」である。ロシアにおいてムイシュキンのなすべき「事業 дело」が「子ども」を救うことであり、同時に、＜子ども＞を教えることであるとすれば、その事業の原形はすでに、マリーをめぐるムイシュキンと子どもたちの話の中に示されている。

## 2.

マリーは罪びとという烙印を押され、村八分にされた女性である。彼女はフランス人の「番頭」に「誘惑」されて連れ去られ、そして一週間後には道におきざりにされた。その後一人、汚れたぼろをまとい、破れ靴をはき、乞食をしながら家に帰ってきたが、誰一人彼女に同情を寄せる者はいなかった。あるいはマリーには娼婦としてのマグダラのマリアのイメージが重ねられているのかもしれない。ただ、マリーの場合、誘惑されたといっても、どの程度、彼女の意志が働いたのかは疑問である。病身の母親を助け、肺病であったのに苦しい日雇い仕事をつづけていたし、その眼は「おだやかで、やさしく、汚れない」ものであったというのだから、おそらくは無邪気な心で相手の言葉を信じこんだのだろう。しかし、いかに心情が潔白であったにしても、事実としての行動あるいはその結果に罪を見る村



人たちは彼女をゆるさなかった。母親自らが率先して、おまえはわたしの顔に泥を塗ったと蔑み、娘を村人たちの嘲笑にまかせた。拷問にかけられたようなひどい苦しみがマリーを襲う。老いた病気の母親を懸命に介抱しても、母親は感謝もせず、口も利いてくれない。寝る時も部屋の外へ追いやられ、食べ物もろくに与えられなかった。老母がすっかり床についてしまうと、食べ物もまったく与えられなくなり、村の大人たちはみな彼女に唾を吐きかけんばかりで、彼女は誰からも見捨てられた。そしてそんなひどい仕打ちを受けても、マリーは抵抗しない。それどころか自身も村人たちの考えを受け入れ、「自分を世界中で一番、卑しい人間だと見なしていた」。しかし、村の掟に縛られないよそ者であるムイシュキンには、村人たちの考えは受け入れられない。彼は村人ではなくマリーの立場に身をおいて、彼女は悪くない、ただ不幸なだけだと考える。彼はマリーを憐れみ、彼女に同情した。

ムイシュキンは思想というものに重きを置かない。オブロミエフスキイは、ムイシュキンにとって「本質的なもの」とは、「人間の行い」であり、「他の人々に対する効果ある接し方」とであると指摘している<sup>20</sup>が、その「行い」、「接し方」とは、それらが論理的に正しいかどうかとは別次元のもの、具体的に言えば、まさに苦しむ者への憐れみ、同情によって示されるものであった。ドストエフスキイから見れば、この憐れみ、同情こそがムイシュキンを「先覚者」たらしめる。

憐れみ、同情という言葉は、なかなかその意味が伝えにくいものだ。ロシア語でも日本語でも、「憐れみ жалость」、「同情 сострадание」というと、何かしらその対象となる相手を一段下に置いているような語感がまじることがある。ムイシュキンが同情する場合は、相手の感じ方はさまざまなかもしれないけれど、彼の視線はあくまで相手と同じ高さにある。それだけではない。彼は相手を感じているのと同じ苦しみを、自身も感じるのである。「わが胸のいたつき これなべての人また生けるものの苦に透入するの門なり<sup>21</sup>」とは晩年近くの宮沢賢治の言葉であるが、ムイシュキンも賢治同様、自己の病という個人的苦しみを通してすべての人の苦しみに

透入する。この「透入」という言葉ほどムイシュキンの「憐憫」あるいは「同情 (= 共苦)」の内実を言いとってくれるものはないだろう。

ムイシュキンの苦に透入する力は、言葉化されないもの、抽象的な論理以前のものである。彼は無意識のうちに透入してしまうだけで、そこから何か教訓じみた<意味>を引き出すこともしない。他人の苦の体験を対象化し、そこにはどのような意味があるかを考察することよりも、他人の体験そのものをもう一度<生き直す>ことのほうが彼にとってははるかに重要なのだ。この苦しむ他人に対するムイシュキンの「接し方」を如実に示しているのが、先に触れたアレクサンドラが簡単に、教訓話としてまとめあげた話である。

ムイシュキンはエパンチン家の人々を前にして、特赦で処刑を免れた元政治犯の友人から聞いた話をした。銃殺刑の宣告を読みあげられてから特赦の勅令が読みあげられるまでの 20 分ないし 15 分の間の出来事、とりわけ最後の 5 分間の恐ろしさと苦しみを語り終えた時、みんなは彼の話に「結論」がないのに戸惑う。「何のために」こんな話をしたのかというアグラヤの問いかけにムイシュキンは、「ふと思い出したのです……まあ、話のついでに」と言葉を濁すが、そのような答えは聴き手たちにとっては、はぐらかしにしか聞こえない。長女のアレクサンドラは、政治犯の男が、もし死ななければ無限の時間がすっかり自分のものになると感じたという一節から公爵の意図を推し量って、あなたはそこから、時は宝物だという「教訓」を引き出そうとしたのだろうと言う。いくら賢者ぶってみせても、あなたの考えていることなんてお見通しだというわけだ。しかし、そのような「透入」という具体的な体験（「心」の体験）を抽象的な論理（「頭」の体験）に置き換えようとする試みは、ムイシュキンのなすところではない。彼は話の意図を探ろうとするアレクサンドラたちにこう返した。「それにしてもあなたがたはまったく肝が据わってますね。笑っていらっしゃるんですからねえ。ところが、私は今の友だちの話にすごいショックを受けて、あとで夢にまで見たのです。その 5 分間のことを……<sup>22</sup>」。のちに、同じような、あるいはそれ以上のショックを、ムイシュキンは苦しむナスターシャ・フィリポヴナから感じ取った。ムイシュキンはモスクワでほとんど

毎日のように彼女に会っていたが、その時にはもう、異様な恐怖の念に駆られるようになる。それは語り手の喩えによれば、全身全霊愛している女性が鉄格子の中に閉じこめられ、鞭打たれて倒れるのを見ているような恐ろしさであるという。このような恐怖にまで達する「同情」の強さは、他の人間たちには誇張としか思えない<sup>23</sup>。ムイシュキンがいくらその感情をありのまま伝えようとしても、聴き手には伝わらない。頭の中でしか他人の立場に立てない、人の苦しみに鈍感な人々は聞いても困惑するか、ただ笑っているだけである。

さらにムイシュキンの「いたつき」についても触れておく。彼は自身の「いたつき」を通して他人の苦に透入するが、その場合、自身が体験した「いたつき」は一つではない。それどころか、ロシアに戻ってからも、その数は増え続けている<sup>24</sup>。

ムイシュキンは孤児として育ち、すでに述べたように「一種不思議な神経の病」に苦しめられてきた過去を持つ。スイスでの治療がはじまった最初の頃は、彼は人々の言っていることすら理解できず、「自分はすべてのものに縁のない赤の他人であり、のけ者なのだ」という思いに苦しめられた。またたわいないことではあったろうけれど、「盗み」に類することをしてしまったと悔やんだこともあるようだ。高潔な考えと卑しい考えが同時に浮かぶこともよくあるという。そのことで自分を責め、「二重の考え」と闘ってみたこともあり、その体験から闘いがいかに難しいものであるか、よく知っている。実際、親友と信じるロゴジンが、自分に対する殺意をもっているのではないかという疑念が湧き上がってきて、そのような疑いをもつ自身の卑劣さに思い悩んだこともあった（殺意は実際あったのだが）。ムイシュキンはロシアへ戻る前も、またロシアへ戻ったあとも、多くの苦しみを味わいつづけてきた。そしてその多くの苦しみは溶け合って、他人の苦しみに透入するための門はだんだんと大きなものになってゆく。とはいえ、それは別の一面から見れば、ムイシュキンのなかの＜子ども＞の純度が落ちてゆく過程でもあるのだが（たとえば、ロゴジンと最初に出会った頃と6ヵ月後の彼を比べると、明らかに疑り深くなっている）。

さて、もう一度、マリーに話を戻そう。子どもたちはムイシュキンと交

流する前は、村の大人たちの考えを疑うことなく受け入れていた。大人たちがこぞってマリーを嘲笑し侮辱しているのを知ると、彼らもそれを模倣する。環境しだいで群れて残酷ないじめに走ってしまうのは、それもまた未熟な子どもの特徴とはいえ、マリーに対する子どもたちの仕打ちは、それはもうひどいものである。ドストエフスキイは決して子どもたちを美化することなく、その仕打ちを事細かく記している。一隊を組んで口笛を吹いたり、手を叩いたり、大声で笑ったり、時には通せんぼをして泥を投げることもある。こわがって相手が逃げると、おもしろがって追いかけるのだが、マリーは肺病のために、はあはあと息を切らしてしまう。すると、彼らは後ろから大声でわめき、ののしる。容赦がない。この大人の雛型のような「邪な」子どもたちがムイシュキンによって、不幸な者に同情を寄せることのできる者に変貌するのだ。

エリアス・カネッティは子どもと奴隷の違いを「変身」の可能性に見、大人になることは変身能力を身に着けることだと語っている<sup>25</sup>が、ドストエフスキイの見方からすれば、子どもであるからこそ変身能力があるわけで、大人になりきってしまえば、その力は失われてしまう。その能力を保持しようとするれば、大人になっても子どものままでいる必要がある。カネッティにとっては、人間の理想形は大人の側にあるが、ドストエフスキイにとっては必ずしもそうではない。

子どもたちがムイシュキンの言葉に耳を傾けるようになるまでには時間がかかった。すでにして大人たちの影響下に育ってきた子どもたちの心は、けっして＜白紙状態＞ではないのだ。彼らは、自分たちの住んでいる村のしきたりを反映し、自分たちと違うよそ者を排斥する。外国人であるムイシュキンも最初は嫌われた。＜罪びと＞のマリーに接吻しているところを見られてからは、ムイシュキンは石まで投げられるようになった。その後、彼はひまさえあれば話をしつづけるのだが、そのうちに、だんだんと彼らも聞く耳を持ってくる。子どもたちは時間をかけて十分説明すれば、分かってくれたのである。そして最後には彼らはマリーをかわいそうに思うようになった。ある日、二人の女の子が、食べ物を手に入れてマリーにもって行くと、マリーはうれし泣きに泣いてお礼を言う。それを見て彼女たち

はマリーが大好きになった。一部が変わりはじめると、全体も変わる。まもなく、子どもたちはみな、マリーが大好きになり、同時にムイシュキンのことにも急に好きになった。その後、子どもたちはずっとマリーにやさしくしたので、死ぬまでマリーは幸せに暮らすことができた。

子どもたちは大人の影響が働かない時には、未熟なせいが無邪気なせいか、どちらのためか分からないが、何事にも気鬱になることはない。彼らには素朴な生命力がある。悪事を働いたとしても、根は浅い。悲しみや憎しみではなく、喜びこそが彼らの生の原動力だ。「子どもたちの多くは学校から家まで走り帰って行く間にもう、喧嘩をしては泣き、またすぐに仲直りしてふざけ出すことができるんです<sup>26</sup>」というムイシュキンの言葉にも表れているが、子どもの心は本来、からりとしていて、じつに「やわらかい」のだ<sup>27</sup>。だからこそ、未知のものを受け入れて変身することも可能なのだ。まさに「生きた素材」である。

### 3.

ムイシュキンはスイスの村の子どもたちを変えた。何か「システム」を持って、あるいは心理学の知識にもとづいて子どもたちを変えたわけではない。彼は自身の気持ちをぶつけたただけだ。互いに「子ども」だからこそ、ムイシュキンは子どもたちに何も包み隠すことなく、すべてを誠実に伝えることができた。彼はただ自分の仲間たちに、マリーがどんなに不幸な娘かということ、根気よく話しつづけたただけである。

ムイシュキンは決して人を裁かない。あるいはケルレルの言葉を用いれば、相手を「ゆるして、人間的に裁く」。自己の体験に即して意見は言うが、それを決して押し付けることはない。たとえば遊興のための金をせびろうとするケルレルに対しては、ほんのしばらくの間、遊興から遠ざかってみてはいかがですと助言したあと、こんなふうに言う。「それは無理ですね。いったい、どうしたらいいんでしょう？ 一番いいのは、ご自身の良心にまかせることですね、あなたはどう思われますか？<sup>28</sup>」。最終的な解決はすべて当人が考えるのであり、ムイシュキンはただ控えめな意見を言うだけだ。もしもムイシュキンと接触した人が変わるとすれば、それは、その人

自身に向上を願う気持ちがある場合だけで、彼は自分をふり返って自ずから変わるのである。

では、子どもの心をまったく持ち合わせない＜がちがちの＞大人たちに対する時はどうか。ムイシュキンは、そのような大人が苦手で、彼らといっしょにいると気が重くなるという。どんなにいい人であっても、すでに出来上がった価値観をもつ大人たちには、ムイシュキンの＜子どもの言葉＞が聞き取れない。

とはいえムイシュキンは、大人たちとの関係を避けているわけではない。たとえば、＜がちがちの＞大人の代表者であるエパンチン将軍に対して彼は、次のように自身の考えを述べている。「我々は一見すると、まるで違う人間のようにです……いろいろなことから見てですね。だからたぶん、共通点なんかありえないと思えてしまう。しかし自身としてはそうした考えを信じません。共通点なんかないと思われることもよくありますが、そんな場合でも、けっこうあるものです……それは怠惰から起こるものです。人間というものはお互い見た目でそれと分類されてしまっ、何も見ることはできないんですよ<sup>29</sup>」。ムイシュキンは、相手から遠ざけられることはあっても、自分から相手を遠ざけることをよしとしない。ムイシュキンは、どんな人間であろうとみな向上を願っているし、また実際に向上する可能性を秘めていると信じている。

スイスを出発する時のムイシュキンは、ロシアでの新しい生活の青写真があったわけではない。新しい生活は突然、準備するひまもなくやってきてしまう。彼は大人たちに対する自己の無力をよく知っている。すでに＜できあがった＞大人は金銭や社会的地位、習慣でがんじがらめになり、「礼儀」と「身振り」が心の中までしみわたっている。にもかかわらず、ムイシュキンはそんな彼らとも共通点があると信じ、誰も見捨てることなく、「すべての人々に対して丁寧で、率直であろうと」考えた。このような一種傲慢にも見える真摯さは、世間の人々の目には滑稽に映る。ムイシュキンも当然、そのあたりのことは十分意識していて、自身の姿を愚かで強情な人間に譬えられる滑稽な「ロバ」と重ね合わせている。ただ、「ロバ（＝バカ）は善良で有益な人間ですからね<sup>30</sup>」という彼自身の言葉からも察せ

られるように、ムイシュキンは働き者のロバを高く評価し、自身がロバであることにある種の誇りをもっている<sup>31</sup>。

この「ロバ」のイメージは「白痴 идиот」とも繋がっているが、わたしの考えではさらに、賢治の理想とした「デクノボー」にも重なる。「アラユルコトヲ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ／ヨクミキキシワカリ／ソシテワスレズ（…）／東ニ病氣ノコドモアレバ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ／南ニ死ニサウナ人アレバ／行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ／北ニケンクウヤソショウガアレバ／ツマラナイカラヤメロトイヒ／ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ／ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ<sup>32</sup>」。ムイシュキンは、マリーのように苦しんでいる人たち、あるいは彼らを苦しめている人たちの中を、一人の「デクノボー」（＝白痴、ロバ）として歩きまわる<sup>33</sup>。苦しんでいる人を救うためには、「ヨクミキキシワカ」る必要がある。苦しんでいる人が、苦しみのあまり人の心を傷つけるような振る舞いをしたとしても、「ヨクミキキシワカ」れば、人はその者をゆるさざるを得なくなるとムイシュキンは考えていた。

たとえば、エウゲーニイは、ナスターシャの歩んだ苦難の道を「アバンチュール приключения」と呼んで、この「アバンチュール」は、彼女の「耐え難い、悪魔のような傲慢さや不遜な食欲なエゴイズム」を正当化するものではないと主張するが、ムイシュキンに言わせれば、そんなふうに主張できるのは、彼が真相を知り抜いていないからである。あるいはエウゲーニイの場合はそれ以前に、同情する心をもたなかったことが大きな躓きとなっているのかもしれない。不幸な者に同情できない彼は真相を知らないのではなく、知りえないのかもしれない。ロゴージンに対しては、ムイシュキンは違う考えをもっている。「彼〔ロゴージン〕は苦しむことも同情を寄せることもできる大きな心 огромное сердце をもっている。もし彼がことの真相をすっかり知り抜いて、あの傷ついた半気違いの女がどれほどかわいそうな存在であるかに思いが至ったら、彼もその時は、過去のすべてを、以前舐めさせられた苦しみをすべてゆるしてしまうだろう<sup>34</sup>」。

「ジブンヲカンジョウニ入レズニ」苦しむ人々のために心を砕くこと、それが賢治の理想とする「デクノボー」の行動の原点であったが、ムイシュキンとの係わりで何より興味を引くのは「病氣ノコドモ」のイメージである。このイメージは強烈で、疲れた母や死にそうな人、冷害を心配する人もみな「病氣ノコドモ」の言い換えだといってよいくらいだ。「オロオロ」したり、「ナミダヲナガシ」たりするのは、デクノボーにとっては、みんなが苦しむ子どもであるからだ。「かわいそうな存在」が病んだ子どもであるとするなら、「大きな心」を持った者は大人である。同情より情欲の勝ったロゴージンはナスターシャに関して「ことの真相」を知りえず、ムイシュキンの思い描く大人にはなりきれなかったけれど、ムイシュキン自身はどんなに苦しめられようとも、「大きな心」で子ども（＝ナスターシャ）をゆるした。彼は自身が子どもの心を持ちながら、同時に「大きな心」を持った大人でもあった。

## 4.

イヴォルギン将軍、イポリート、そしてナスターシャ・フィリポヴナ等々、苦しむ人たちとムイシュキンは接触したけれども、結果的に誰一人として救い出すことはできなかった。「同情は全人類のもっとも重要な、おそらくは唯一の法」であるとムイシュキンは言うが、その「同情」をもってしても、彼らの苦しみはぬぐい取れなかった。しかし、このことをもって、作品が失敗作だとは言えないだろう。創作ノートにも、公爵には援助の力がないと記されている通り、ムイシュキンが力不足であることは作者にも自明のことであったのだから。

問題はなぜ救えなかったのかという点にある。

マリーが救われたのは、例外的なケースである。相手が美しい人間だからといって、あるいはゆるしてくれる、かわいそうに思ってくれるからといって、不幸な人たちはマリーのように素直にその思いを受け入れてくれるわけではない。たとえば、イヴォルギン将軍は酔って盗みをはたらいたことに良心の咎めを感じ、苦しみ続けている。ムイシュキンはその苦しみを察し、「同情」する。そして、言葉に出しはしなかったけれども、彼が本



来誠実な人間であると信じ、その罪をゆるした。イヴォルギンはその真情を察し、心の底からムイシュキンに感謝する。しかし、苦しみが消え、自身の生活が一変するかというと、そうはいかないのだ。感謝の念と同時に抑えがたい「激情 порыв」が湧き上がってくる。そして次の日になると、それだけでなく、すでに不幸な人間の「品格」を貶めるような「同情」は受けたくないという拒絶の手紙を送りつけてきた。悪事をゆるされ、感謝はするが、やがて「激情」によってすべて元の木阿弥になり、また悪事に走る。それは、イヴォルギンがニーナ夫人相手にこれまで何度も繰り返してきたことで、ムイシュキンはそのサイクルを断ち切ることができなかった。

「謙虚さは大いなる力である」とはイポリートの伝えるムイシュキンの言葉だが、この「謙虚さ смирение」の対極にあるものが、もう一つの力、すなわち抑えきれない＜私＞の「激情」にほかならない。イポリート自身は、「謙虚さ」は「無邪気な人々」の専売特許だと反発し、それに「我あり Я есмь」を対峙させているが、この個としての絶対的なく＜私＞を自覚すると、人は否応なく「激情」に追い込まれる。イヴォルギンやイポリートがムイシュキンの美しさを感じながらも、ムイシュキンを拒むのはこの誇り高い＜私＞の「激情」のためである。ムイシュキンの「同情」は、この「激情」の壁に阻まれると、もうなすすべがない。

ではナスターシャ・フィリポヴナはどうだろう。

ナスターシャの置かれた境遇は、貧とは無縁ではあるけれど、マリーに劣らず辛いものである。7歳の時に両親をなくし、トーツキイに引き取られた彼女は自身の意志とは無関係に、12歳の時から4年間の高等教育を受け、彼の趣味に合った「囲い者」になるように計画的に育成された。そしてトーツキイの計画通りに、妾として4年余りを「慰み村」（何という命名！）で過ごした。その村にはトーツキイが年に二月ずつ泊まっていて、彼女を辱め、みだらなことをして帰って行く。辛さのあまり、彼女は何度も自殺を考えたが、怖気づいてできなかった。その後、自身が単なる愛玩物であったことに強い憤りを覚えるようになった彼女は突如村を離れ、これまでとはまったく違う憎悪に燃える「新しい女性」となってトーツキイ

の暮らすペテルブルグへやってきた。「自己の平穏と慰安」をこよなく愛していたトーツキイは、彼女の常軌を逸した行動が「不自然で不愉快な形をとって」現れることをおそれて、彼女をなだめにかかる。それから5年、ナスターシャは蓄えもせず「つつましい」生活を送っていたが、トーツキイのほうは自身の「自由」が脅かされることに耐えられず、エパンチン將軍と相談し、彼女を將軍の秘書ガーニャと結婚させようと画策する。將軍の意を受け、ガーニャは「あらゆる情熱を傾けて」ナスターシャを愛している純情な青年の役を懸命に演じるが、実際には、トーツキイからナスターシャに約束されていた大金に目がくらんだだけで、内心ではナスターシャのことを「けがらわしい女」だと軽蔑していた。一幼くして「囲い者」にされたナスターシャが味わわねばならなかった苦難の内実は、決して、「アバンチュール *приключения*」などという軽い言葉でまとめあげられるものではなかった。

ナスターシャもマリーと同様に、「世間」から差別され、冷たい偏見の目で見られている。その<目>は、マリーを罪びとだと見たスイスの村の人々のものと変わらない。そしてナスターシャもマリーと同様に、自身が潔白であるとは思っていない。なるほどナスターシャは、トーツキイとエパンチン將軍に対しては毅然とした態度で、「自分は誰にもゆるしを乞うつもりはない」し、また「決して自分が悪いとは思っていない」と言明している。しかし口とは裏腹に、心の中では自分のことを罪深い女だと、どこまでも信じ込んでいた。ナスターシャの深い精神的苦悩を察したムイシュキンが初めて会ったその日にもう、マリーの時と同じように、「あなたにはいかなる点でも罪はありません」と告げている。ナスターシャがトーツキイのところにいたのは彼女の意志ではなかったが、ムイシュキンの考えでは、意志のないところには責めるべき罪もないのだ。

ムイシュキンの言葉はナスターシャの心を動かすが、しかし彼女もまた、イヴォルギン將軍のように救われることはない。彼女は、イヴォルギンやイポリートのように、一方的に憐れまれる存在であることに耐えることができない。彼女の中の<私>が抵抗する。彼女もまた、人から一方的にゆるされるだけでなく、自身も、人をゆるしたいのだ。モスクワでは、ムイ

シュキンが彼女を「光明」が見えるようになるまで導いていったことがあるが、すぐにまた、「腹を立てて」、「傲慢な同情」や「自分と同じところまで引き上げてもらうこと」など要らないお世話だと拒否している。あるいはナスターシャはその罪悪感に惑溺して、そこに自らの慰めを見出したのかもしれない。なるほど、ムイシュキンも、「こうして絶え間なく自分の汚れを意識するのが、彼女にとっては何かしら不自然な、恐ろしい快樂かもしれない」と語っている。

とはいえ、＜私＞の自覚や、歯痛の快樂を語る地下室人に特有な自意識だけがナスターシャの救われぬ原因ではない。ムイシュキンも感じていたように、彼女の中には、何か「強く深いもの *сильное и глубокое*」があり、それが最終的にムイシュキンの救いの手を撥ね退けてしまったのである。

重要なのは、ナスターシャの固守する＜私＞はイヴォルギンの＜私＞とは違い、ムイシュキンへの愛によって、この上なくたいせつなもの、絶対的なものではなくなったということである。

自分のことを真剣に心配してくれる相手を受した点ではナスターシャもマリーと変わらないが、彼女はマリーとは違い、愛する相手の立場になって考えることができた。彼女は、ムイシュキンの愛を真剣に受け入れたからこそ自身の幸福より、彼の幸福を優先させようとした。

ナスターシャの望むムイシュキンの幸福とは端的に言えば、彼が自分のようなく汚れた＞過去をもつ女とではなく、子どものように純真なアグラヤと結婚することである。ナスターシャは自分のためではなくムイシュキンのために、懸命になってその結婚が実現するようにアグラヤにも働きかける。しかし、その働きかけをアグラヤは、「献身的行為」を意識したナスターシャの「虚栄心」から出たものだと歪曲して受けとった。結果的にナスターシャはアグラヤからこれ以上ないほど、手ひどく侮辱されることになる。

侮辱されたナスターシャは、我慢ができず、怒りの「激情」にすべてを任せてしまうが、この侮辱に対する態度がマリーとは決定的に違う。マリーは懸命に母親の世話をしていたにもかかわらず、母親の死んだ時、教会の牧師から大勢の人前で、この女が母親を死に至らしめた張本人だと侮辱

された。母親の死は病のせいでマリーの所業とはまったく関係なかったが、謙虚な彼女は牧師の嘘に反論もせず、ただ棺のうしろに立ったまま、涙を流すだけであった。マリーには「謙虚さ」はあっても、ナスターシャのような人間としての「誇り」がなかった。吉村善夫はキリスト者の立場から、ナスターシャのような「誇り」をもたないマリーは、その罪惡観が「絶対的な境域」にまで深まっていたから、罪のゆるしを信じえたとし、ナスターシャは「遂にムイシュキンの憐憫の次元にまで来たりえなかった」と結論づけている<sup>35</sup>。吉村はナスターシャの「誇り」に否定的な意味しか見出していないのだが、ロシア語の *гордость* は肯定的な意味と否定的な意味の二通りの意味をもつ。ナスターシャがここでいただく *гордость* (誇り) は不正になじむことのできない「潔癖な感情」として肯定的に捉えるべきものである<sup>36</sup>。

ナスターシャは侮辱に耐え切れない。が、その「激情 *порыв*」も長くは続かず、再び彼女はムイシュキンの幸せのために身を引こうとする。彼女の「誇り」は傲慢ではなく、人間としての尊厳に根ざすもので、それ自体はなんら批判すべきものではなかった。非はすべて、相手をよく知ることなく「さばいた」アグラーヤの無理解にあったのだ。そしてその無理解の根底にあったのは、彼女の幼さ、子どもっぽさであった。「あなたはとてもお母様に似ていますね」とムイシュキンは言うが、アグラーヤもまた、彼にとっては彼女の母親同様、「すべてのいい点においても、すべての悪い点においても」子どもであった。

ここでもまた、「子ども」が問題になるのである。

## 5.

ナスターシャ・フィリポヴナがロシアの<マリー>であるとするなら、おそらくスイスの子どもたちの役割を果たす位置にいたのは、アグラーヤである。「わたくしは、高潔な純朴さと、人に対する絶対の信頼という点で、あの方のような人を、生まれてこの方、一人として見たことがない<sup>37</sup>」とムイシュキンを絶賛する彼女は、本来であれば、彼の「事業」の協力者になってもよさそうな女性である。

アグラーヤは20年間、両親から常に監督され、「瓶詰め」されたような生活を送ってきた。小さい頃からお雇いの家庭教師から教育を受けてきて、学校へは一度も通ったことがない。彼女は姉妹の中でも特別な存在であった。姉たちは妹の結婚の持参金を稼ぐために、自分たちは愛情抜きの結婚をしてもいい、当然そうすべきだと信じていたし、両親すら姉たちが彼女の幸せのために犠牲になることを容認していた。そのような期待の重圧から逃れたいという思いと、どうにかして人の役に立ちたい、社会に「利益」をもたらしたいという純粋な願いから、彼女は家を出ることを計画する。具体的に何か「教育事業」のようなものをやろうと考えるのだが、学校にも通ったことのない彼女には、その事業をどのようににはじめればいいのか、見当がつかない。そこで「長いこと考え続けて」、指導者として子ども好きで、なにやら学がありそうなムイシュキンが選出された。アグラーヤが自身の朗読したプーシキンの詩『哀れな騎士』を通して語っていることを信じれば、彼女はムイシュキンを最初は理解できなくて笑っていたが、その後、愛するようになった、というよりも、その「功業」を尊敬するようになった。彼女の言う「功業」とは、自分の姫君が誰であろうと、一たとえ人の「囲い者」であった女であろうと—その姫君を理想と決めたからには、自分の全生涯をそれに捧げることを指す。

ムイシュキンが彼女の事業のパートナーに選ばれたのは、ムイシュキンが自分に宛てて書いた手紙を「ラブレター」と勘違いしたからである。ナスターシャ・フィリポヴナへの思いを断ち切りさえすれば、彼は自分を生涯、支援してくれると思ったことは間違いない。ムイシュキンの側から言えば、アグラーヤとの結婚なんて、相手側が言い出さなければ、考えも及ばなかったことだろう。ムイシュキンはアグラーヤの「無邪気さ」「けがれない心 сердце невинное」に強く惹かれ、いつもいっしょにいたかっただけなのであるから。

ある時、アグラーヤと気まづくなつて落ち込んでいると、二人の少年が彼女に頼まれ、仲直りの針鼠を届けてくる。ムイシュキンは「まるで子どものように笑っては、ニコニコ明るい顔つきで自分を眺めている二人の少年の手を、ひっきりなしに握りしめ」る。この喜びは、子どもどうしの間

柄でおきるもので、ナスターシャとの間では湧き上がらない。

子どもはみなそうだが、アグラーヤもまた、子ども扱いされることを極度に嫌う。だから、せいいっぱい背伸びをして大人ぶる。母親に隠れてポール・ド・コックを二冊ばかり読めばもう、コキュだの不倫だのといった男女間の問題に通暁しているのだ、「子どもじゃない」のだと思っている。ムイシュキンの「これ以上ないくらいに丁寧な」手紙を「ラブレター」だと勘違いしたのも、ムイシュキンのナスターシャへの愛情を「恋」と思い込んだのもすべて、この子どもっぽさに原因がある。その無邪気さは、ムイシュキンがマリーにキスをしているのを見て、彼のマリーに対する愛情を「恋」だと考えたスイスの子どもたちの誤解を想起させる。アグラーヤが大人の「すべての言葉」が理解できると豪語した時には、公爵も「思わず微笑ん」で、「あの尊大な、性格のきつい美人の中に、どうしてこんな子どもが、実際ひよっとするといまなおすべての言葉は分からない子どもが、潜んでいるのかと、信じられない思いにかられた<sup>38</sup>」。

注意すべきは、ここでのムイシュキンの「微笑」だ。これはさきほどの「子どものような」笑いとは違って、可愛い、無邪気な子どもを見守る大人の微笑である。すでに触れたように、ムイシュキンは子どもでもあり、同時に大人でもあるのだ。そしてこの無邪気な子どもを前にした「大人」のムイシュキンのイメージもまた、キリストに重なるものだ。ナスターシャもそれを感じたからこそ、アグラーヤに送った手紙の中で、ムイシュキンとアグラーヤを、キリストとそのそばで戯れる幼児の姿になぞらえたのである。

とはいえ、純真なだけの子どもは存在しない。純真な子どもは同時に未熟な子どもでもある。たとえばアグラーヤは、ムイシュキンの「高潔な純朴さ」や「功業」を尊敬しているかもしれないが、一方で学がないことに物足りなさを感じている。学がなければ、尊敬できないとまで言う。しかし彼女が考える「学」は幼稚なもので、たとえば「誰が何年に、どんな条約によって何をしたのか」などという問いかけにちゃんと答えられることなのだ。ムイシュキンとナスターシャの関係についても、何でも知っていると豪語するが、ムイシュキンについて知っているというその内容は、「あ

あなたは、いっしょに逃げたあのけがらわしい女と、丸一月の間、同じ部屋で暮らしていた」といった類の、うわべばかりの、偏見に満ち満ちた貧弱なものであった。すべてを知っていると思い込んでいるアグラーヤは、じつは何も知らない。ここに問題があるのだ。

アグラーヤは、大人たちの言うことを鵜呑みにしてマリーのことをけがらわしい女だと思い込んでいた頃の、あのスイスの子どもたちと同じ段階にいる。スイスの子どもたちは実際にマリーに石を投げたけれども、ムイシュキンがアグラーヤに向かって、「あの人を辱めないでください。石を投げないでください」と懇願している。ムイシュキンは子どもたちのマリーへの誤解を正そうとしたように、アグラーヤのナスターシャへの誤解を正そうとする。ただ今回は時間が足りないし、置かれた状況も違う。感化を及ぼすのもムイシュキン一人ではない。自分と同時に他の女にも＜恋している＞と思っているのだから、やきもちも焼くだろうし、「囲い者」に対する周囲の誹謗中傷もある。イポリートなどは自分が愛されないことのあてつけか、ムイシュキンはナスターシャ・フィリポヴナの「食べ残し」だとみんなが陰で囁いていると告げ口し、アグラーヤの自尊心をわざと傷つけた。アグラーヤとナスターシャの直接対決をセッティングしたのもどうやら彼である。死を前にしたイポリートの最後の「事業」は善行ではなく、悪意ある「ゲーム」を仕組むことだった。

誰よりもアグラーヤに感化を及ぼしたのは、彼女と同じ貴族階級に属するエウゲーニイである。ナスターシャに対して抱いているアグラーヤの考え方の根本は、エウゲーニイからの受け売りであると言ってよい。彼女はナスターシャを強く非難して言う。

「あんなにまであなたを愛し、求婚してあなたに名誉を与えた高潔な人と、なぜ結婚なさらないのです？ その理由はもうはっきりしています。ロゴージンと結婚すれば、どんな侮辱だって感じないですむからです。かえってたくさんの名誉を受けすぎることになるんですからね！ エウゲーニイ・パーヴリチが言ってましたが、あなたはあまりにもたくさんの詩を読みすぎ、『あなたの……境遇にしてはあまりにも教養がありすぎる』、あなたは

本で作られた女で、白い手の女ですって。それにあなたの虚栄心を加えれば、それですべての理由がそろうわけですね……<sup>39</sup>」。

ここでのアグラヤは、まさに自己中心的な子どもである。ムイシュキンの考えからすれば、ナスターシャに求婚することによって名誉を与えられるのは、求婚する側の人間であるが、彼女に偏見をもつアグラヤにはそうは思えない。ムイシュキンの幸福を願って身を引こうとしているナスターシャの心がまるで読めていないし、ナスターシャが味わった苦しみに対する理解もまるでない。彼女は、ナスターシャへ向けられたロゴージンの恋情も知っていたにもかかわらず、ただ無教養な商人というだけで、彼を蔑む。

エウゲーニイによれば、ナスターシャ・フィリポヴナは、ロマンチックな本を読みすぎて自身の置かれた社会的立場を勘違いしている「白い手の女」である。瓶詰めの生活のなかで甘やかされてきたアグラヤの「手」もまた、真っ白なはずなのに、いくら人の意見を鵜呑みにしたからとはいえ、なぜ、彼女は相手を「白い手」だと弾劾できるのか。それは、彼女が子どもだからである。「子どもたちはまだ生活を体験しておらず、自分の価値を知らないから、誰もが自分こそはコロンブスのような人間になることができる」と想像する<sup>40</sup>とは、創作ノートの中の言葉で、「それだから子どもたちに説くことは効果」があると続くのだが、しかし一歩間違えば、この子どもの想像力のたくましさ、あるいは信じやすさはとんでもない傲慢な態度を呼び込む。自分が「コロンブスのような人間」になることを強く信じる者は、そのことを信じるあまり、未来を先取りして、想像の中のコロンブスの立場でものを見てしまうのだ。アグラヤもまさにそうだった。教育事業か何か、何でもいいが、高邁な「労働」を夢んでいた彼女にとって、何かにかこつけて「働きに出ない」ように見えるナスターシャは、まさに墮落しているのである。自身の高い理想以外は何も見えない。ナスターシャの「境遇」などというものは、二の次である。どんな境遇にあらうと、関係ない。「あなたが誠実な女になりたかったら、なぜあの時ご自分の誘惑者を、トーツキイをあつさりと……お芝居抜きで、捨てておしまい



にならなかったのです?<sup>41</sup>」。トーツキイを「誘惑者」と呼び、さらには彼が「墮落した天使のために、ピストル自殺をしかけたと聞いても、べつに驚きませんよ<sup>42</sup>」と、あろうことか、被害者を前にして加害者であるトーツキイを弁護するようなことまで口走る。アグラーヤ自身「たいせつな知」に欠けていると言っていたエウゲーニイであるにもかかわらず、冷静さを失い、彼の作り上げた<心のない>解釈を安易に信じてしまったのは、彼女が子どもであったからだ。人を信じやすい子どもだからこそ、「祖国を思って苦痛に苛まれる魂の無類の高潔さ」をもつというポーランドの「亡命伯爵」や、彼の親友であるカトリックの聴聞僧にも騙されるのである。

## 6.

ムイシュキン、ひいてはドストエフスキイの子どもへのこだわりは尋常ではない。ムイシュキンが抱くたいせつな考えの多くは、<子ども>のイメージと深く関係している。奇妙な言い方だが、何やらムイシュキンにとっては、<子ども>は思考するために不可欠な言語（ラング）の一種であるかのようなのだ。説明できないような事柄になると、必ず子どもが参照枠の中に登場する。

ムイシュキンはロシアにやってきてしばらくすると、ロシア人の魂を熱烈に信じはじめる。ロシア人はヨーロッパ人とは違って、宗教的感情の本質が理解できると考えたからだが、その本質とは、ムイシュキンによると、「どんな論証、どんな過失や犯罪、どんな無神論をもってこようと」説明できない「何か」である。ただ「論証」はできなくとも、それは「ロシア人の心には、何よりはっきり、すぐに見出せる」ものである。この説明できないものを伝える一つの手立てとして、ムイシュキンは<子ども>に対する親の愛情を引き合いに出す。

ある時、ムイシュキンは赤ん坊を抱く一人の百姓女に会った。その女はどうやら生まれてはじめて笑顔を見せたらしいその赤ん坊に、十字を切っている。ムイシュキンがそれを見て、どうしたんだねと尋ねると、彼女はこう答えた。「自分の赤ちゃんが初めて笑うのを見た時の母親の喜びというのは、ちょうど罪びとが神様の前で心の底からお祈りしているのを天上か

らご覧になる、その度ごとの神様のお喜びと、そっくり同じでございますよ<sup>43</sup>」。

この話は、ムイシュキンによると、「キリスト教の本質のすべて」を示すもので、初めて笑う赤ん坊が親に呼び起こす喜びには、「人間の父としての神に対する理解のすべてと、父親が自分の子どもを思うのと同じような神の人間に対する喜びのすべて」を表現している。

初めて笑う赤ん坊を見て母親が味わう感情を理解できなければ、どれだけ言葉を重ねようと、「宗教的感情の本質」は理解できないということになるだろうか。論証好きで聡明なエウゲーニイならば、おそらく赤ん坊の初笑いも、単なる筋肉の収縮運動を笑顔と勘違いしているだけかもしれないと、まずは疑ってかかるだろう。ムイシュキンに言わせれば、そのような疑いをもつ者はつまるところ、ロシア人の魂をもたない根無し草、「ロシアでのまったくの余計者」であることを意味する<sup>44</sup>。しかし、アグラーヤは違う。ムイシュキンは、アグラーヤには、論証抜きで、宗教的感情の本質を感じとることができる、どこまでも信じている。人の心を考える時には「やさしさ」が必要で、「ただ真理だけがある、ということはつまりは、一不公正ということになります<sup>45</sup>」と、ムイシュキンに強く語ったのはまさに、アグラーヤなのだから。

エウゲーニイから、二人の女性をめぐっての自身の行動を批判されたムイシュキン、自身の非を認めながらも、エウゲーニイには出来事の全部はわかっていないが、アグラーヤならわかると、繰り返し述べている。—

「あの時二人はまったく見当違いなことばかり話していたんです。(…)ですからあんなことになってしまった……あなたには説明できません。でもひょっとすると、アグラーヤにだったらうまく説明できるかもしれません……<sup>46</sup>」。「ここには何かがあって、それをあなたに説明できないのです、エウゲーニイ・パーヴロヴィチ、説明できる言葉がわたしにはないのですよ、しかし……アグラーヤ・イワーノヴナなら、わかってくださるでしょう！ ええ、私はいつだって彼女ならわかってくれると信じていました<sup>47</sup>」。

ナスターシャたち、苦しむ者たちは神の子どもである。ひいては人間というものはみな子どもである。これこそエウゲーニイには説明できないが、

アグラーヤにだったらうまく説明できるかもしれないと、ムイシュキンが考えていたことの核心である。

アグラーヤとは共通の「言葉」があるとムイシュキンは信じている。それはとりもなおさずアグラーヤが<子ども>であり、ムイシュキンの「誠実さ」を信じていてくれたからだろう。にもかかわらず、二人の関係は破綻する。いったいなぜなのか。問題は、やわらかい心をもったアグラーヤならば、ナスターシャについてすべてを知りえるはずなのに、彼女はそれを知ることができない、あるいは知ろうとしないところにある。

「ある人に罪があれば、その人についていっさいのことを知る必要があるのに、我々は どうして そう することができないのでしょうか！<sup>48</sup>」

かつてムイシュキンは、ガーニャを批判するイポリートに、「きみがすこしでもあの人の内情を知っていたらねえ。その視点から見るべきです<sup>49</sup>」と論じたことがある。ガーニャが公爵を陥れる「落とし穴」を掘っていると教えられても、ガーニャはえらい目にあっただから、落ち着き済ましてはいられないのだとムイシュキンは言う。人をさばくには、その人のすべてを知らなければならない。そうしても、すべてを知ることができるならば、人は人をゆるし、もはやさばくことができなくなる。—これが彼の基本的な考え、ケルレルの言う「無類の哲学」である<sup>50</sup>。ところがアグラーヤは、ナスターシャに関わる事柄においては特に、「自身の好みで」相手が悪いと決めつけるともうそれ以上、相手のことを知ろうとはしない。

スイスの村の子どもたちは罪の女マリーについて、そのすべての内情を知ることができた。それは、ムイシュキンが彼らに語りつづけることができたからである。しかし、アグラーヤに関してはそうはいかなかった。決裂のあとも、ムイシュキン自身は何度も彼女と会って話そうとするが会わせてもらえない。断られても、次の日には子どものようにけろりとしてまた、性懲りもなく会いに行くが、彼が自分よりナスターシャを選んだと信じ込んでいるアグラーヤはもはや会ってはくれない。ムイシュキンに対する尊敬の念より、自尊心を傷つけられて湧き上がる「激情」のほうが上ま

わったのだ<sup>51</sup>。そしてアグラヤが本人の承諾の上で外国旅行に連れ出されることになる、ムイシュキンもさすがにあきらめざるをえない。これが彼の限界である。たとえ拒否されても、彼女と会うためには外国にだって出てゆくという気構えはない。もちろん、ナスターシャのことのほうがより心配だったということもあろうが、そもそも、ロゴージンのもっているような行動と直結する大きな情熱は、ムイシュキンにはなかったのだ。

「パルフォン、やらなければならないことはたくさんある！ このロシアの国では、やらなければならないことはたくさんあるんだ！」<sup>52</sup>と、ムイシュキンはロゴージンに語っていた。「ロシア人の魂」は聖なるものに焦がれている。しかしその「魂」をどのように教え導けばよいのか。ドストエフスキイは、一つの実験として、ムイシュキンという<美しい人間>を導き手としてロシアに送り出した。その痕跡は人々の心に残った<sup>53</sup>が、「やらなければならないこと」は何もできないまま、彼はスイスの療養所に戻らざるをえなかった。何よりムイシュキンには苦しむ人に「同情」することと、邪気のない<子どもたち>を感化すること以外に、何も事を起こすことはできなかった。「事業」には力が必要なのだが、その力がムイシュキンには欠けている。ではロゴージンは？ 彼にはムイシュキンにはない情欲という大いなる力があつたが、その力は制御することができず、暴走する。

ムイシュキンの美しさを描き出すことが『白痴』におけるドストエフスキイの最大の意図であれば、結末は明るくなくともいいのかもしれない。しかし残った問題はそのままにはしておけない。

『白痴』を書き上げたドストエフスキイは、ロゴージンの荒々しい力をなんとかプラスの方向に導けないかと考える。子どもの美しさが、情欲に根ざした生命力をどのように制御できるか、美と力をどのように統合させればよいのか。その問題に、ドストエフスキイは『カラマーゾフの兄弟』において真正面から取り組むことになるだろう<sup>54</sup>。

- 1 E.H. カー、松村達雄訳『ドストエフスキー』(筑摩書房、1968年)、195頁を参照。
- 2 Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.8. Л., 1973. Стр.182. (以下、本全集は『ドストエフスキー 30巻全集』と略記する。『白痴』からの引用はすべて、本全集8巻のものである。)
- 3 新谷敬三郎『『白痴』を読む』(白水社、1979年)、121頁を参照。「エウゲーニイが主人公に面と向かって言い立てた批評は、『白痴』という小説そのものに対する批評でもあった」と、氏は指摘している。
- 4 『ドストエフスキー 30巻全集』第8巻、485頁。
- 5 同上、481頁。
- 6 同上、457頁。
- 7 同上、458頁。
- 8 1868年1月1日付書簡。『ドストエフスキー 30巻全集』第28巻、第2分冊、251頁。
- 9 同上
- 10 同上、第8巻、58頁。
- 11 同上、61-62頁。
- 12 前掲『ドストエフスキー』、205頁。
- 13 M・L・フォン・フランツ、松代洋一・椎名恵子訳『永遠の少年』(ちくま学芸文庫、2006年)、14-15頁を参照。
- 14 ちなみに、このレーベジェフの言葉は、H.H.ストラホフが『白痴』第1編の印象としてドストエフスキーに書き送った一節から採られている(『ドストエフスキー 30巻全集』第8巻、371頁、411頁を参照)。あるいはドストエフスキーは、ストラホフの言葉の正しさを認めつつも、その言葉に重みを感じなかったのかもしれない。
- 15 目に見えないたいせつなことが見える子どもと、たいせつなことが見えない大人を対立させる見方は、すでに触れたサン＝テグジュペリや、あとで言及する宮沢賢治にも共通するものだ。前者については甲田純生『「星の王子さま」を哲学する』(ミネルヴァ書房、2006年)、後者については、拙稿「宮沢賢治と子ども—『風の又三郎』をめぐって」(「海上保安大学校研究報告」第52巻第1号、2007年11月)を参照されたい。
- 16 『ドストエフスキー 30巻全集』第9巻、239-240頁。
- 17 同上、第8巻、58頁。
- 18 同上、458頁。
- 19 同上、484頁。
- 20 См.: Обломиевский Д. Д. Князь Мышкин. — В кн.: Достоевский. Материалы и исследования (2). Л. 1976. Стр.284.
- 21 『校本宮沢賢治全集』(全14巻、筑摩書房、1973年 - 1977年)第12巻上、56頁。
- 22 『ドストエフスキー 30巻全集』第8巻、53頁。
- 23 江川卓はこの恐怖を、『『不能』のムイシュキン』に対して、ナスターシャが激しいセクシャル・ハラスメントを仕掛けたからではないかと推測しているが(『謎とき『白痴』』新潮選書、1994年、193頁)、そのような推測は、鉄格子の中で鞭打たれる女性の比喩に合わない。恐怖の由来は後述するように、ムイシュキンのゆるしを受け入れられず激しく抵抗する、その姿の痛ましさにあるのだろう。
- 24 宮沢賢治の言う「いたつき」とは「病」のことであるが、ここでは病に加えて精神的な苦しみも含める。

- 25 エリアス・カネッティ、岩田行一訳『群衆と権力』下（法政大学出版局、1971年）、167頁を参照。
- 26 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 8 巻、64 頁。
- 27 この子どもの心の特徴に関してはドストエフスキイも『作家の日記』で言及している（同上、第 25 巻、187 頁）。スイスの村の子どもたちは、いじめる側から思いやる側へと大きく変化することにおいて、『カラマーゾフの兄弟』のコーリャを中心とする少年たちに似る。『カラマーゾフの兄弟』ではムイシュキンに代わって、アリョーシャが子どもたちを変えた。
- 28 同上、第 8 巻、259 頁。
- 29 同上、54 頁。
- 30 同上、49 頁。強調は筆者。
- 31 ロシアを出てからずっと疎外感を覚え、耐え難い憂鬱に苦しんでいたムイシュキンは、スイスでロバの鳴き声を耳にしたとたん、晴れやかな気分になった。このエピソードは象徴的である。彼は、ロバこそ仲間だと自覚することで自分が何者であるかを知り、心が安らいだのである。
- 32 『校本宮澤賢治全集』第 6 巻、353-354 頁。
- 33 賢治は「羅須地人協会」の活動中、稲作不良を心配し風雨の中を駆けずりまわったために、風邪から肺炎にかかって病臥に伏した。農民たちの中にはそれを見て、やはり育ちのいい柔なお坊ちゃんだと、陰で揶揄する者もいた。「デクノボー」というあだ名を受け入れることは、このような揶揄に耐えることを意味する。
- 34 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 8 巻、191-192 頁。
- 35 吉村善夫『ドストエフスキイ』、新教出版社、1965 年、164 頁。
- 36 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 23 巻、35 頁。
- 37 同上、第 8 巻、471 頁
- 38 同上、358 頁。強調はドストエフスキイ。
- 39 同上、472 頁。
- 40 同上、第 9 巻、242 頁。
- 41 同上、第 8 巻、473 頁。
- 42 同上。
- 43 同上、183-184 頁。
- 44 創作ノートでは、エウゲーニイは「懷疑論者で無神論者」と呼ばれていた（同上、第 9 巻、274 頁）。その他、同ノートには、「理想がない」、「本物の貴族」、「ロシアの地主・紳士の最後のタイプ」といったエウゲーニイに関する記述が見られる。
- 45 同上、第 8 巻、354 頁。ムイシュキンはこのアグラヤーの言葉について、「覚えておいて、よく考えてみようと思います」と述べている。
- 46 同上、483 頁。
- 47 同上、484 頁。
- 48 同上。強調はドストエフスキイ。
- 49 同上、432 頁。
- 50 同上、493 頁を参照。ナスターシャが結婚式から逃げ出したことに触れ、ムイシュキンは「彼女の置かれた状態に身を置けば……それはまったく当然のことです」と言った。「無類の哲学」とは、その言葉を評したもの。
- 51 スイスでは、ムイシュキンはこの「激情」の壁に突き当たることはなかった。この＜私＞を死守しようとする壁は総じて、ムイシュキンを拒否するロシアの特徴を語るものである。

---

<sup>52</sup> 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 8 巻、184 頁。

<sup>53</sup> 「新世代」のコーリャやヴェーラ・レーベジェフは明らかに、公爵から何らかの感化を受けている。エウゲーニイは、ムイシュキンの回復がきわめて悲観的であることを知らされると、それが「ひどく胸にこたえた」。エウゲーニイはムイシュキンが後戻りのできない絶望的な状況に陥って初めて、ムイシュキンについて真剣に考えはじめるのである。ドストエフスキイは、同じことを『白痴』の読者にも期待しているのかもしれない。

<sup>54</sup> 「カラマーゾフ的な力」と＜子ども＞の関連については、拙稿「ドストエフスキイにおける子ども－『カラマーゾフの兄弟』をめぐって」（「海上保安大学校研究報告」第 52 巻第 2 号、2008 年 3 月）を参照されたい。